

「ヒト」が「ひと」になるために ～ 環境が子供に与える影響

生まれてくる子供の体質と性質(気質)は、遺伝よりもむしろ、胎児期に多くを決定します。特に体質はその度合いが強く、妊娠中の食生活が子供の体質決定に最も寄与します。

性質(気質)面においては、例えばお母さんのストレスが多く、不安や緊張が強い状態からは神経質な赤ちゃんが、ゆったりした精神状態からはのんびりした赤ちゃんが生まれる確率は、約80%にも達します。



1920年、狼に育てられた2人の少女がインドで発見されました。「カマラ」(推定年齢8歳)、及び「アマラ」(推定年齢1歳半)と名づけられたその少女達は、発見当時、言語(ヒトの言葉)を話すことが出来ず、4つん這いで歩き、あたかも狼のような挙動を見せておりました。

その後、社会生活を送るための様々な教育を受けましたが、小さいアマラは1年足らずで亡くなり、残されたカマラも9年後に亡くなるまで、3歳ほどの知能にしか発達しなかったと云うのです。言葉はある程度理解できるようになりましたが、アマラが亡くなった時以外、人間らしい感情表現は最後まで見られなかったと記録されています。

その少女達は人間としての遺伝子(DNA)を持ち、五体満足でありながらも、「ヒト」が「ひと」になるための最も重要な時期(臨界期:生後3歳まで)を狼に育てられたことにより、人間としての知性を身に付けることができなかったのです。

このことから、「人は、生まれ持った体質・性質・才能・体格(DNA)等に係わらず、生後の環境が与える影響の方が、人間形成により深く係わる」と言うことがわかります。

人間学の多くの分野に影響を与えたドイツのルドルフ・シュタイナーは、3つの人間の条件とその臨界期について述べています。彼は、人間は、生後1歳までに「霊性(愛や信頼などを感じる心の力)」を、2歳までに「知性(学習意欲)」を、そして3歳までに「意志(価値判断基準)」を獲得すると述べています。そして、この3つをもって始めてヒトはひと(人間)になるとしています。同様な考察を、行動学者デモンズ・モリス及びイギリスの心理学者ロレンスが行っています。

遺伝的あるいは胎児期に形成された気質・体質が、生後の環境(努力)によって変化(克服)した例をもう一つご紹介いたします。

肥田式強健術を開発した故肥田春充(1883-1956)は、幼少期は病弱な上痩せ細っていたため、「茅棒」のあだ名がつけられ、2度死の宣告を受ける程の虚弱児でありました。しかし、18歳の時に一念発起し、様々な医学書、健康法、運動法を研究実践して、独自の心身鍛錬法(肥田式強健術)を編み出しました。この鍛錬によりわずか2年で強靱な肉体を手にし、更には体力ばかりでなく頭脳も飛躍的に向上し、中央大学・明治大学・早稲田大学の三大学四学科に入学し、好成績を収め卒業しました。

大学卒業後も更に鍛錬と勉学に励み、スポーツ界、格闘技界、政財界、宗教界等様々な分野の指導者から相談を受ける程の人材になりました。

また、食事は体質だけでなく、気質にも影響を与えます。ドイツの化学者リービッヒは、著書の中で「一匹のクマがパンと野菜で飼育されていた間は大変温和な性質であったが、数日間、肉食をさせたところ、凶暴になった。また豚も肉食をさせると性質が荒くなって人間に向かって攻撃をしてくるようになる」と述べています。

更にフェレット（白イタチ）の実験では、はじめ、手に負えない荒い性質のフェレットも、普通の菜食を与えたところ大変おとなしくなったという報告もあります。

これらは動物における実験報告ですが、人間においても一般的に菜食家に比べ肉食の人の方が気質が荒い傾向にあります。

このように私たちは、生まれ持った遺伝子・体質・性質等よりもむしろ、生後の環境によって与えられる影響及び生活習慣の方が、より深く私たちの人間形成に係わると言うことがわかります。

<参考文献>

- ・「新しい生物学の教科書」(新潮社 発行 池田清彦 著)
- ・「生命はぐくむ『ひと』たちへ」(吉備人出版 発行 山縣威田・時子 著)
- ・「鉄人を創る肥田式強健術」(学習研究社 発行 高木一行 著)
- ・「血液と健康の知恵」(地湧社 発行 千島喜久男 著)
- ・「幸福を生む家の建て方」(PHP研究所 発行 富田辰雄 著)